

北鎌倉台峯トラスト 北鎌倉の景観を後世に伝える基金

会報

北鎌倉だより

2011年2月 NO.24



自然を育む

湿地のハンノキ

目次

■新しい里山作りと台峯	2
■何度も歩きましょう・歩く会の参加者の声	4
■北鎌倉・台峯トラスト「会員の集い」	6
■会計報告	7
■川上さんのちょっと昔の物語	8
■台峯の草花・芳名録	9
■台峯の周辺—歴史つれづれ—②富士山	10
■活動報告・伝言板	11
■歩く会の資料	12

新しい里山作りと台峯

昨年名古屋で開催されたCOP10において、日本は世界に向けて「SATOYAMA」という言葉を発信しました。そこには、世界中の人々が、身近な自然から得た知識を共有すべきという理想が掲げられています。近年、環境省が「里山」を「里山・里地」と併記するようになったのは見逃せません。「里山」が地域の環境保全の象徴となってきたのです。

新しい里山作り

日本には、山間地から都会まで様々な里山があります。鎌倉のような都市近郊では、私有地であった里山の公有地化が進み、生態系保全と市民参加を目的とした「新しい里山作り」が求められています。

都市近郊の里山には山奥の数倍の密度で生物が生息しています。わずかながら貴重な生物も残存していますが、狭い緑地で保全していくには工夫が必要です。多くの税金を投じて確保した里山も、管理の良し悪しで生態系が良くも悪くも変化することをご存知でしょうか？ 鎌倉市の「緑の基本計画」においても、緑の量だけでなく質の向上がうたわれるようになりました。里山の自然は、そっと見守るだけでなく適度に人が関わる必要があるのです。

今、管理と生態系について関心が高まっています。雑木林や昔ながらの田んぼや畑が身近な生きものを育ててきたことが見直され、里山管理マニュアルのような本も出版されるようになりました。とはいえ、どこまで昔の里山を復元すべきか、地域によって事情が異なり論争も起きています。台峯の場合はどのように考えるべきでしょうか？

台峯は特殊な里山？

台峯の場合、山崎小学校裏の谷戸で田畑を耕作しますが、谷戸の池周辺には田畑を復元

しません。これは田畑を耕作する場合に必要なになってくる、道具や収穫物の収容施設を台峯の内部に作れないことや、道の整備をしないで現状の自然を守るためです。他の市民団体や一般市民の要望も取り入れて、このような方向性に決まったという経緯があります。幸い、隣接する中央公園は田畑や雑木林が里山的に保全されているので里山の生物が豊かです。台峯緑地は生き物の隠れ家としての役割があるのです。

里山の荒廃を活かす保全作業を

日本中の里山が荒れているから昔に戻せという声が聞かれます。原則としてその通りだと思います。しかし、里山が荒れて増えた生物もいることを忘れてはなりません。例えば、昔はなかった木が生えてきて木の種類が増えた。木が大きく育ったため森林性の野鳥の種類や数が増えたなどです。隅々まで、昔のような手入れをすることが難しいのですから、里山の荒廃をプラスに評価しながら、可能な範囲で里山の手入れをしていけば良いと思います。台峯緑地は、まだ一般公開されていないので、里山生物が多い畑周辺などを中心に部分的に手入れを試みています。

「七割主義」の保全作業

保全作業をするからには、隅々まで草刈をしないと、みっともない、達成感がないとい

う人が多いでしょう。でも、一割でも刈り残しの部分があることで、生き物の多様性が増すことが多いのです。これは、実際に観察(モニタリング)してみないと分かりにくいのですが、狭い緑地で様々な生物を守るにはこのような配慮も大切です。人間的な感覚ではなく、生き物の視点で考えることが自然と人の新しい関わり方ではないでしょうか。

昔の里山にはなかった新しい保全作業

里山の荒廃で新たな自然環境が生まれています。台峯の場合、休耕田(湿地)にハンノキ林が出来たり、ツリフネソウやオギが咲いたりして、皆に大切に思われるようになりました。「新しい里山」ならではの景観と言えるでしょう。これらの環境も放任すれば移り変わるので、田畑のように何らかの定期的な保全作業が必要と思われ、その方法を模索することが新たな課題になっています。台峯ではオギ原に進入してきたカナムグラやササを駆除したり、湿地の保全の為に水路の侵食対策も行っています。これらは昔の里山管理作業にはなかった新しい試みでしょう。また、帰化植物を含めた外来生物の駆除が、全国的に重要な課題になっています。「新しい里山」の保全作業は、機械力で能率を上げるだけでなく、植物の種類を見分けながら手作業で丁寧に進めていくことも考えなければなりません。高齢者や作業が苦手な人にも活躍の余地があるのです。市民参加ならではの保全作業の価値をいかに見出し伝えることが出来るか、私たち環境NPOの課題です。

里山を見つめる心

一般の人たちが、ボランティア活動の場と

して里山を見つめるようになったのは、大きな時代の変化に違いありません。「新しい里山」では作業をするだけでなく、皆の汗が無駄にならないよう、保全作業でどのように自然が守れたか観察し記録に残していくべきでしょう。そこで必要なのが「モニタリング」と呼ばれる自然観察です。ある地域の何種類かの生物の増減を、保全作業と関連付けながら記録していくことが、「モニタリング」の基本となります。学術的な調査というよりは、地元の人々の経験則の積み重ねと言った方がわかりやすいでしょうか。支える手(作業)だけでなく見つめる目(観察)も必要なのです。生き物を愛でながらゆっくり作業すること、いかに楽しむか考えること、それが「新しい里山」のスタイルではないでしょうか。

特定の緑地に生き物たちを囲い込んで良しとする自然保護の時代は終わりました。台峯の自然と関わることでもっと生き物は増えますし、台峯で増えた生き物が川に流れたり住宅地にも広がったり、そんな夢も描けます。自然を保護するだけでなく、「自然との新たな関わり方」が生まれる場として、台峯保全の在り方を考えたいと思っています。

久保廣晃

(注) COP10 とは

国際条約を結んだ国が集まる会議(締約国会議)のことを「COP (Conference of the Parties)」と呼びます。多様な生き物や生息環境を守り、その恵みを将来にわたって利用するための国際条約「生物多様性条約」では、10回目の締約国会議「COP10」が2010年10月、愛知県名古屋市で開催されました。

何度も歩きましょう

なだ いなだ

ぼくは、なんども台の緑地を歩きました。最初は驚き。鎌倉に、こんな自然がまだ残されていた！二度目歩いて、えっ、こんなものもある。あんなものもある。また、驚き、三度目には、どうしてこれが見えなかったの、という驚き。四度目も驚き。季節の流れ、時の流れが見えてきた。そして、五度目、六度目、いつの間にか、自分の中に、この自然への愛着の芽生えを見つけた驚き。これは、ぼくの子ども時代の原風景じゃないか。

いっしょに歩く若い人たちは、いい年をした老人が、子どもに帰ったような、眼の輝きをしているのを見て、驚くだろう。これが、昔の日本のありふれた野山だったの！

何度歩いて、だれが歩いて、驚きが待っているのが、台の緑地です。

北鎌倉・台峯トラストの新しい葉を作成しています。

タイトルは 北鎌倉・台峯しぜんの緑をともに…

～新しい里山の形を求めて～

当基金は1998年台峯緑地を保全するために創設。2007年には台峯緑地保全が正式に決まりました。設立当初の目的は達成されましたが、台峯緑地をはじめとして北鎌倉の緑地をよりよい形で次に世代に引き継ぐ活動はまだ終わりません。公園が一般に開かれるまで、どのような緑のあり方がふさわしいか、基本設計に基づき観察と手入れ試行を繰り返しながら学んでいます。知恵をだしあい、楽しく活動を続けていくために多くの方に関心をもってください、活動への参加をお願いする葉です。この葉のために初代理事長のなだ いなださんが上記の呼び掛け文を寄せてくださいました。

歩く会参加者の声

はじめて参加したのですが、自然（草木や鳥など）に対する皆さんの知識と、台峯の緑を保全しようという熱意に驚き、とても刺激を受けました。身近な自然を見つめることで、色々なことが見えてくることも分かりました。子ども達もとても楽しかったようです。また参加させて頂きたいと思います。ありがとうございました。

長井直子

小生はハイキングが好きで参加しました。お蔭さまで種々の野鳥、木々の名前を覚えたような気がします。忘れて、またおしえてもらう必要があるいでしょうが。特にアオジはずめと如何に違うか？オギと薄の相違などが参考になりました。何となく歩いていた散策道もトラストの皆さんが整備に木目細かな気遣いをしている様子が解り、また新鮮な眼で楽しむことが出来るようになると思います。また春の山桜、新緑の時期に参加したいと思います。同時に時間があれば散策道の整備にも参加できればと考えております。

御法川 斎

2011年に入って初めての歩く会に、初めて参加しました。台峯の近くに越してきて約15年。自分の庭のように思い、歩いてきた道でしたが、久保さんの説明を聞きながら歩くと、これまで見えなかった台峯が現れてきました。「木」として、「かわいい小鳥」としてしか認識していなかったものが、もっと多様で多彩であることを知りました。ただ、「枝先が魔女の指の木」や「チャンバラの木」や「芽のところでジグザグに枝が曲がっている木」という風に記憶に刻まれてし

まって、木の名前を覚えていないのですけれど（あ、ネムノキは覚えてますよ。笑）。「自然の声を聴き、対話するには、そのための単語を知る必要がある。その単語が、木や鳥の名前なんです」（*私の記憶に拠っているので、間違っているかもしれません）。この久保さんの言葉がとても印象深く胸に残っています。冬の、きりりとした空気の中、大きく空に広がってゆく枝の姿と鳥の声は、とても美しいものですね。

田中文世

結婚して鎌倉に住み始めてから、7年程ですが、最近まで台峯の存在すら、知らずにおりました。子どもの成長に合わせ、海や山など、鎌倉市内のいろいろな所に出掛ける機会が増えました。又同時に鎌倉という自然に恵まれた地域を大切に守り、活動されている方が多くいる事実を知る機会が増えました。幼い子どもを連れての参加ですが、子どもを自然の中に連れ出し、自然を愛する心を育てていきたいと考えています。環境を守らなくては、といくら話し合っても、自然の大切さを知り、たくさん自然と遊んだ経験がなければ、何も始まらないのでは、と思っています。今

後共、よろしく
お願い致します。

若林紀子

たのしみからまたいきています。
おはればれまなみ (67)

自然観察入門の私にとって、台峯を歩くことは、草、木、鳥、虫そして人間との出会いの場である。9月、乳白色の小さなスズメウリの実とその繊細なつるが、とても可愛かった。10月、ホトトギスが一枝に整然と、つぼみから満開までの花を咲かせ感嘆した。1月アオジのひと群が、草の実をついばんでいた。

月毎に新しい出会いがあり、先導して下さる久保さんから季節に応じた自然の見方を教わることで、本当にありがたく思う。毎月通うことで、自然を見る目が細くなるようで、嬉しい。スタッフの方々の地道な活動と親切な手引き感謝しています。

小野早苗



はじめて参加したのは'05年の春のことです。最初は時折でしたが、今では里山と湿地、田んぼまで残っているこの台峯周辺の魅力にすっかりはまりこんでしまいました。毎月同じ場所を歩くことで、その自然がいかに微妙で繊細か、また知れば知るほどいかに置くが深いかな等を教えられ、自分がこれまでどんなにぼんやりと表面だけを眺めていたかということに悟られます。しかしこれらが判り、虫の饗宴や松虫の声を聴く夕べなど、今日では得難くなった体験を含めた様々な楽しみが味わえるのも、歩く図鑑のような久保さんをはじめ理事の方々、前日に道筋の整備をしてくださる方々、また古くからこの地を愛し守ろうとしている方々があってこそだということもまた気付かされます。これからは恩恵を受けるだけではなく、そこから卒業して後につづく人々や若い人たちのために力をだすこともやらねばなあ、など思っているところです。

絹川早苗

北鎌倉・台峯トラスト 「会員の集い」

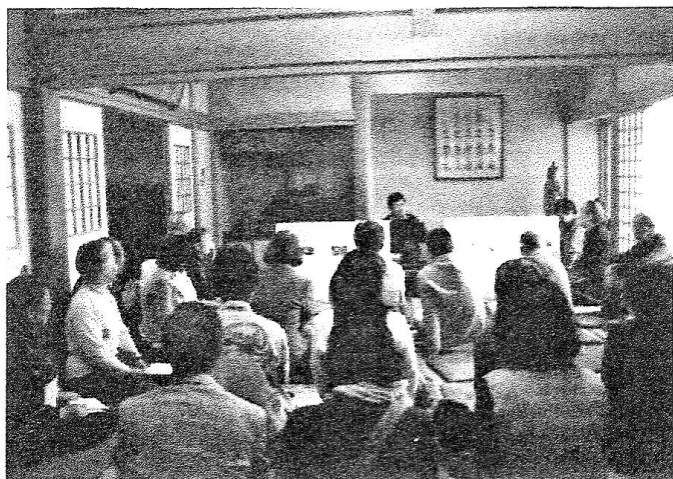
2010年11月23日、北鎌倉光照寺にて恒例の「会員の集い」が開催されました。石黒理事長の開会の挨拶に始まり来賓として「鎌倉みどりショップ」から、代表として石川さんから祝辞をいただき、これからの課題として、間伐材の活用を市としても後押ししていきたいとの抱負が語られました。

次に、久保理事から「台峯生きものマップ作り」として、台峯現地で毎月2回実施しているが、「オギ原の手入れ」の成果を確認でき、また、ここ数年に渡る活動の成果として動植物の変貌を知ることができ貴重な体験を得た、我々は業者が出来ない手作業と観察で付加価値のある里山再生を目指すことを目的としていきたいと述べられました。

次に「みどりの基本計画」について市川理事から、鎌倉市へ緑地保存を要望した地域が都市公園に指定され、開発地域にストップを懸けることができた複数の地域があり一定の成果を挙げることができたとの報告があった。



休憩後、初代理事長のなだいなさんから日本のジャーナリズムは、産業に関わることはニュースにするが、私たちの生活環境の変化についてはまったく報道されない。「ミツバチの減少」と「蟻の巣ころり」(ネオニコチノイ



久保さんの話に関心する参加者

ド)との危険な関係。また、なださんが実際経験された例として、市民の要望で建設された精神科家族会の保養所に厚生省の役人が天下りをしたが結果として赤字となり閉鎖された。補助金(税金)もらったの市民運動はタブーである。日本にもヨーロッパの「緑の党」の出現が求められると話されました。

フリートークでは「基金」として5年後の台峯開園に備えどのような方向性を目指すのかとの質問が出され、久保理事は「生きものを大切に」「住民参加」を基本として、業者任せではなく、新しい里山の手入れを目指したい、また、広町のような指定管理者制をとるにしても、業者の代行や、施設管理中心の活動ではなく台峯の生きものを守る方向で運動していきたいと述べました。出席者からは間伐後の木材の再利用と方法などが問題提起されました。また、理事からは「基金」による「山の手入れは」事前に鎌倉市に届けた上での作業であり勝手に手を加えているのではなく、事後の作業結果も市に報告している。との発言もありました。

今回参加者によって提起された様々な問題は「基金」にとって重要検討課題であることが認識されました。 小田原茂夫

会 計 報 告

特定非営利活動法人 北鎌倉の景観を後世に伝える基金
(平成22年4月1日～平成23年1月31日)

科目	23/1月末日まで	摘要	
収 入	正会員	69,000	③3,000円
	個人会費	304,500	本人②2,000円 家族③500円
	団体会費	9,000	③3,000円
	民間助成金	130,000	みどりショップ他10件
	寄付金	176,672	今年度入金 23件
	機関誌収入	500	機関誌「北鎌倉の風」
	カレンダー収入	269,400	400冊発行内寄贈27冊
	受取利息	320	普通預金利息
	雑収入	2,256	前期分保険料清算の上戻り金
	収入合計	961,648	
支 出	(緑地の保全・管理事業)		
	整備作業費	81,215	道具研磨代
	賃借料	12,000	道具小屋借地料
	雑費	8,980	保全連絡会
	小計	102,195	
	(普及・研修・事業費)		
	通信費	50,515	会員宛会報、集い発送料
	印刷製本費	263,792	カレンダー製作費、会報1回その他
	編集費	70,000	カレンダーデザイン
	事務消耗品費	27,397	山歩きピラ、会報用紙、インク代
	賃借料	48,000	山ノ内公会堂使用料
	雑費	15,120	集い関係費用
	小計	474,824	
	(広報・出版事業費)		
	通信費	36,540	ホームページ回線使用料
広告宣伝費	30,000	鎌倉朝日掲載料	
小計	66,540		
(交流・協力事業費)			
負担金	3,000	鎌倉NPOセンター年会費	
事務消耗品費	4,306	活動写真のパネル作成インク他	
雑費	1,700	搬出	
小計	9,006		
(管理費)			
会議費	14,490	総会費用他	
通信費	33,700	会員証送付、振込料	
事務消耗品費	23,456	コピー代、用紙代、封筒他	
賃借料	27,000	山ノ内公会堂10月迄	
渉外費	40,000	香典代3名	
雑費	11,741	DCカード年会費他	
小計	150,387		
支出合計	802,952		
保 有 資 産	現金	18,753	
	当座預金	953,696	郵貯
	普通預金	1,338,145	三東U ¥1,318,422/郵貯 ¥17,723
	定期預金	112,000	三東U ¥49,000/郵貯 ¥63,000
	貯蔵品	19,196	切手にて寄付を受け取る。
合計	2,441,790		
正味財産	2,441,790	前期繰越金 ¥2,283,094 内ホームページ更新積立金 ¥120,000含む	

川上さんのちょっと昔の物語

モジナの穴

昭和20年代、台峯周辺に生息していた生き物は、ウサギやモジナ、他にイタチ、ハタネズミ、アカネズミ、ヒメネズミ、カヤネズミ、モグラ位だ。近年になってタヌキ、アライグマ、ハクビシン、リスなどが取って代わり、今は昔ながらの生き物は絶えてしまったか、数を減らして細々と生きながらえているだけだ。

その頃、子ども達の知る限りでは、モジナの穴は3箇所あった。

一つは人家の近くで廃寺の竹藪の斜面、他に谷戸の雑木林の斜面に2箇所、昔はモジナも多かったのか、我家の井戸に落ちて、溺れ死んだモジナもあると親から聞かされた。モジナの穴は横穴で、8～10メートル位続いている。入口は直径20センチ位の穴だ。其のうちの2箇所をモジナを捕るために、猟師が掘り進めて掘り抜けてあった。子ども達はそんな処は見逃さない。入口を、さらに拡張する仕事にかかる。モジナの穴は赤土の掘りやすい処にあり、たちまち子ども達数人が入れる穴にして、シコ筐で屋根を葺き、小さな竪穴住居にしてしまう。そこは新たな子ども達の山遊びの拠点、陣地になるのだ。

そこで、小さな子はガキ大将に勇気を試される。穴の奥までは、大人が腹ばいでやっと進める直径のままだ。順番に一人ずつ、穴の行き止まりまで潜らされる。真っ暗で曲がりくねった細い窮屈な穴を、鼻先に湿った土の匂いを嗅ぎながら、手探りでモグラのように進む。モジナは人を化かす怖い獣だ。奥に一

つ目小僧や妖怪が居ないことを願いながら、恐怖心を抑えて行き止まりまで辿る。何事も無く引き返す時も、向きを変える余裕も無い、せまい穴を後ずさりで戻る。ようやく穴の入り口まで戻って、明るい光を見て安堵するのだ…。ただそれ其れだけの事だが、硬く目をつぶったような漆黒の暗闇と、窮屈な穴の閉塞感だ。やりとげた小さな子は、恐いことを克服できて、一人前の仲間になり強くなったような気持ちになるのだ。

台峯にモジナが生息していたのは、昭和20年代までで、私が鳥やウサギを追い回し、狩猟をしていた30年代には、痕跡無く絶滅していた。それから暫く年代を経て、タヌキやアライグマ、ハクビシン、タイワンリスなどが生息するようになった。川上克己
(モジナ=ムジナ=アナグマ)

(注)

●アナグマ

頭胴長 52cm～80cm 尾長 12cm～20cm、
体重 5～14kg

●カヤネズミ

頭胴長 5.4～7.9cm、尾長 4.7～9.1cm、
体重 7～14g の日本では一番小さなネズミ

●アカネズミ

頭胴長は 8～14cm、尾長は 7～13cm、
後足長は 2.2～2.6cm、体重は 20～60g

●ハタネズミ (ニホンハタネズミ)

頭胴長 9.5～13.6cm、尾長 2.9～5.0cm
体重 22～62g

台峯の草花・芳名録



「基金」では設立時の理事長、なだ いなだ氏の提案で、月1回台峯歩きを始めて、今年は14年目に入ります。

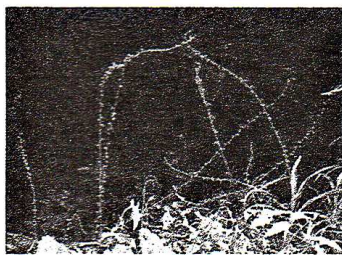
ご存知のように台峯は数十年前まで近隣の方の田圃、畠、そして明るい雑木林だったそうですから、住宅地にもみられるようなタデ類、ダイコン草、ネコジャラシ（え



ハンゲシヨウ

のころぐさ狗尾草)、ヨモギ(蓬)などはいたる所にあります。湿地にはオギ(荻)、ミソハギ(禊萩)、ハンゲシヨウ(半夏生、半化粧)、ツリフネソウ(釣舟草)が群生しています。毎月頒布して

頂く資料にはざっと数えただけでも)40余の花があげられています。不思議なことに、それらの花々は年によって咲き方に違いがあるように見えます。去年の春はタチツボスミレ(立ち壺堇)、ハナイバナ(葉内花)が少なかったようです。その代わり、夏にはカラスウリ(烏瓜)が一面に蔓を伸ばし、だから秋には朱の濃淡の実が沢山ぶら下がっていました。ホトトギス(杜鵑)は思う存分茎を伸ばし、初秋にはミズヒキ(水引)が道の両側に大変目につきました。果物には「ナリ年」が隔年にあると聞きますが、花もそんな



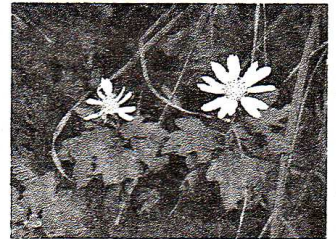
ミズヒキ

ことがあるのでしょうか。台峯に咲くどんな花も大切なのですが、やはり絶えてほしくない数少ないものもあります。

これは灌木ですが、谷戸の池の下流にオニシバリ(鬼縛り、別名ナツボ

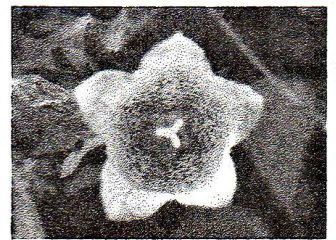
ウス)の大きな株があって、立派な紅い実に驚かされたのに、小株に分かれてしまって、昨秋は実も見えませんでした。湿地のススキ(薄)の根もとにひっそり見えたナンバンギセル(南蛮煙管)も減りました。ヤブラン(藪蘭)は至る所にあります。シユンラン(春蘭)は少なくなりました。去年、人目に付き易い所に二株みつかつて、歩く度に皆でそっと見に行ったものです。

極めつきはキンラン(金蘭)で、目下一株だけ、今年の春も咲いてくれるかハラハラと言うところです。おもしろい形のツルニンジン(蔓人参)も



リュウノウギク

見当たらなくなりました。それ程希少種ではないのかもしれませんが、シラヤマギク(白山菊、別名ムコナ)、ヤブタバコ(藪煙草)、リュウノウギク(竜腦菊)、シュウブンソウ(秋分草)なども台峯では場所が限られています。ツルニンジン(蔓人参)、ホタルブクロ(蛍袋)、コシオガマ(小塩竈)等の種を採取してふやそうと試みていますが、これがなかなか難しいのです。



ホタルブクロ

台峯は園芸種の花をふやして、観光に供する場所ではありません。持ちこまず、持ち出さず、華やかではなくても地味にひっそりと一所懸命に咲く花、花に限りませんが、木も鳥も虫も私たちはみんなで大切にしていきたいと願っています。

和泉あき

台峯の周辺—歴史つれづれ— ② 富士山



当会恒例の「歩く会」では必ず通るし、また「山の手入れ」や「モニタリング」の集合場所にもなっている山ノ内配水池からは、裾野を広げた富士山がよく見える。空気が澄み雪を被った今頃の季節は特に雄大だ。初めて来られた方々は、この景色を見ただけでも台峯を大いに気に入ってくれる。

そういえば、昨年12月15日に湘南地方一帯に黒い粉が降り注ぎ、時あたかも出現したふたご座流星群からのものかとも思われたが、結局富士山東斜面の火山灰が強風で高く舞い上がり当地まで運ばれて降り下ったものと判明した。

この火山灰は1707年12月16日（今回とほぼ同じ月日である）に始まる宝永大噴火により堆積したもので、ケイ素と鉄などから成り、富士砂と呼ばれて山野草の土に使われる。富士山から採取してくればタダの筈だが、禁止されているので業者から買わざるをえない。今回の降砂はあまりにも微量だったから、用土としては足りないだろう。

しかし三世紀前の大噴火では大量の降下火砕物が御殿場などを2、3mも埋め尽くして家屋も作物も全滅させ、更に今回同様の季節風に乗って江戸でも2cmほど積もった。鎌倉辺りでは10～30cmも堆積

したと推定される。30haの台峯に20cmとすると、単純計算で6万m³、50mプール24杯分の灰が積もったことになる。

相模の国の各所で、背を伸ばし始めたその年の麦が埋まってしまったが、その後も耕作を続けるためには田畑から大量の「焼け砂」を撤去しなくてはならなかった。これは大変な作業であったと推察される。撤去できなかった山野などの分は雨によりやがて流失して用排水路の埋没、川床上昇による氾濫、更には海底に堆積し江ノ島の海老や海苔の不漁など、多くの不幸を永くもたらした。

しかし、遡ると太古からの火山活動によるこうした火成岩や灰がやがて風化、磁鉄鉱が分離し、鎌倉に多い砂鉄となったらしい。そして正宗の刀が作られることにもなる。

ところで筆者の生家の庭にはその一隅に富士砂が大量に埋まっている所がある。ご先祖様かどうかは不明だが、宝永年間にここに住んでいた人が敷地に積もった灰を掃き集め穴を掘って埋めたものと親から聞かされた。おそらくは当時どこの家でもそのような処分をしたのであろう。

毎月の「山の手入れ」では、筆者は「老人の畑」を担当することが多い。大噴火のあった頃もここで畑作をしていたのだろうか、灰は沢山降ったのだろうか、どこかに集めて埋めた穴があるのではないか、そんなことを考えながら土を耕している。

（前号において、建立された碑を「人道之碑」としましたが、「人道之礎」の誤りでした。お詫びして訂正します）

本田隆史

活動報告

(2010年8月～2011年2月)

- 1 定例理事会 8/1・9/5・10/3・11/7・12/5
1/9・2/6
- 2 トラストの集い 11/23
- 3 台峯を歩く 8/15・9/19・10/17・11/21
12/19・1/16・2/20
- 4 山の手入れ 8/14・9/18・10/16・11/20
12/18・1/15・2/19
- 5 モニタリング 8/1,14・9/5,18・10/3,16・
11/7,20・12/5,18・1/15・2/6,19
- 6 台峯保全連絡会 8/27・9/28・10/26・
11/30・12/24・1/25・2/22
- 7 公園海浜課との現地視察および作業
8/19・9/14,27・10/7・
11/5,19・12/14・1/11・2/8
- 8 マツムシを聴く会 9/14,20

伝言板

●カレンダー「台峯の四季」2011年版
双眼鏡でも簡単には見られない小鳥シリーズ、
お陰様でご好評により完売いたしました。

ありがとうございました。

●新しい葉について

表紙はこの24号の表紙と同じ、通称「ひとりハンノキ」にしました。“ひとり…”と呼ぶようにハンノキ林の樹と違い、他に遮る木々の枝が少なく、1本だけでノビノビと育っています。私たちの活動もこのようにスクスクと育っていきますように、との願いを込めて…。

編集後記

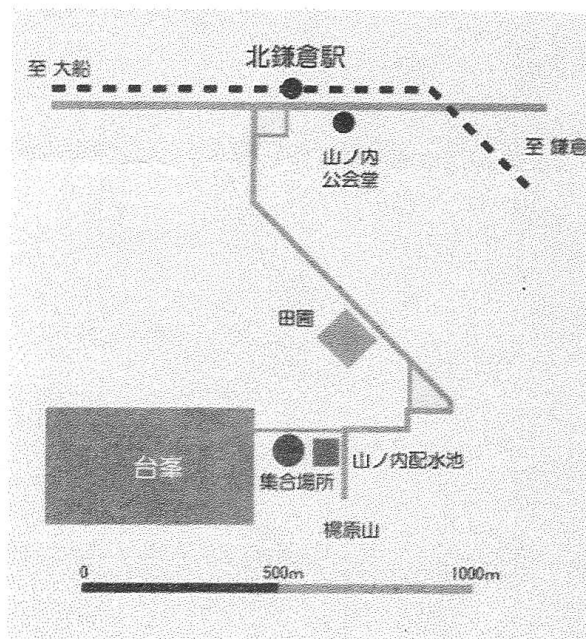
編集に手間取り、発行が遅れて焦っていた日に東北関東大震災が起きました。停電で、暗く寒い5時間余を懐中電灯、ろうそくとラジオで過ごし、電気がついたらテレビの津波の映像に圧倒されてしまった。何とか力になりたいと思っています。

手入れに参加しませんか？

毎月第3日曜日の前の土曜日、10時～12時
服装は長袖、長ズボン、歩きやすい靴（湿地の作業は長靴）軍手と帽子、飲み物は必携。

作業に必要な道具は用意します。

参加ご希望の場合は事務局にご一報ください
集合場所は下図、山ノ内配水池付近です。



新規会員募集中

年会費 2,000円

会費及び寄付金の振込み先

郵便口座番号 00250-2-20454

口座名 北鎌倉の景観を後世に伝える基金

会報24号

発行日 2011年3月18日

発行者 NPO法人 北鎌倉の景観を後世に伝える基金

事務局 〒247-0062 鎌倉市山ノ内704-9

(和泉方) Tel 0467-47-9892

Email aramaki@gw3.u-netsurf.ne.jp

HP <http://www.kamakura-daimine-trust.org/>

写真提供：池 英夫・石原瑞穂・市川和夫

イラスト提供：市川和夫

歩く会の資料

毎月歩く会で配布される資料は、その時期にみられる動植物の情報が詰まっています。
久保さんの解説の助けとして、漫然と歩いていては気がつかない季節ごとの魅力を味わうことができます。

台峯を歩く会 3月資料 2009年 3月15日
北信濃トヨタ自動車会館 特別 無料

台峯を歩く会 3月資料



早春の木の花
ウグイスカグラ、アオキ、オニシバリ、
ヒサカキ（サカキの代用に。花は独特の香）
キブシの花（早春の山道に咲く代表的な花）
イヌシデの花、ヤマネコノメソウ（湿った
道端にある小さな草）

裏面（右側）
早春の野草の花
ヒメオドリコソウ、ホトケノザ、キランソウ、
タチツボスミレ（ササを刈ると増える）、ハ
コベ、ヒメウズ、タネツケバナ、ツルカノ
コソウ



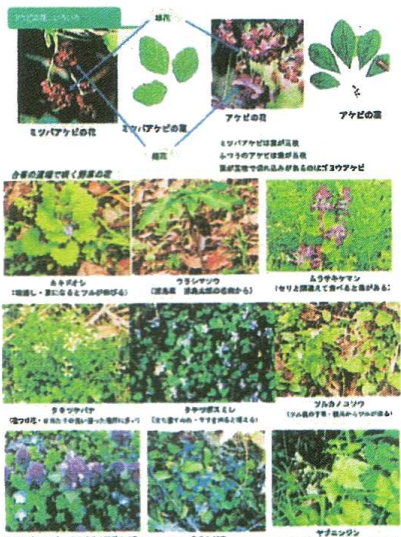
台峯を歩く会 4月資料 2007年 4月15日
北信濃トヨタ自動車会館 特別 無料

台峯を歩く会 4月資料



新緑を楽しむ
台峯から眺めた斜面の新緑
左から 濃い緑はシイ、カシなどの常緑
鮮やかな緑はシデヤミズキ
黄色っぽい緑はクヌギやエノキ
白っぽい緑はコナラ

裏面（右側）
アケビの花いろいろ
台峯の道端で咲く野草
カキドオシ、ウラシマソウ、ムラサキケマン、
タネツケバナ、タチツボスミレ、ツルカノコソウ、
ヒメオドリコソウ、キランソウ、ヤブニンジン



台峯を歩く会 5月資料 2008年 5月18日
北信濃トヨタ自動車会館 特別 無料

台峯を歩く会 5月資料



初夏の蝶
アゲハチョウの仲間（大型のチョウ）
アオスジアゲハ、モンキアゲハ、ナミアゲハ
タテハチョウの仲間（中型のチョウ）
コムスジ、イチモンジチョウ
ジャノメチョウの仲間（蛇の目模様の特徴）
ヒメジャノメ、ナミヒカゲ、ヒメウラナミジャノメ
ルリシジミ、ベニシジミ

裏面（右側）
初夏の樹木の花
シイノキ、ミズキ、エゴ、マルバウツギ、ノイバラ、
ハコネウツギ

